

医師の英語力アップへ 国家試験の英語問題を増やすよう財団が提言 現状の1%を20%に

2026/06/11, 18:30 JST

有村瑞希

医師の海外留学を支援する日米医学医療交流財団は、医師国家試験の英語問題の出題を2割に増やすよう求める提言書を厚生労働省と文部科学省に送付した。



提言書をまとめた（左から）徳田専務理事、遠藤理事長、高瀬会長 Photo: 読売新聞社

全ての医師が一定レベルの医学英語を理解できる環境を整え、日本の医療の質を底上げし、患者により良い医療を提供することが狙い。

現在、医師国家試験には英語問題が例年4問程度出題されているが、割合は全400問の1%にすぎない。財団によると、各大学の医学部での英語教育は年々充実してきたものの、国家試験で英語の出題割合が低いことから、試験対策に集中する数年間にわたり、英語の学習が中断されるという課題がある。

一方、最新の医学知識や治療法は主に英語で発信され、医師国家試験を通過した後も、英語論文を批判的に読み解く力や海外の研究者との交流のためのコミュニケーション能力が求められる。また、近年は都市部だけでなく地方でも外国人の患者を診る機会も増え、ますます英語の必要性は高まっている。

提言書では、医師国家試験での英語問題の出題数について「400問のうちの80問とするか、当面は漸進的に実施するために1割から始めるか、検討の余地がある」などとした。

財団の高瀬義昌会長（たかせクリニック理事長）は「日本の英語教育の環境により、世界で活躍できる可能性のある医師の機会がそがれている」と話し、徳田安春専務理事（群星沖縄臨床研修センター長）は「世界中から優秀な人材を集め、日本がリーダーとなるためには医学英語能力を国家試験の段階から評価するべきだ」と話した。

© 2026 The Yomiuri Shimbun
YDJ-20260611-KKG-GYTGT00073

©2026 Dow Jones & Company, Inc. All Rights Reserved.

DOW JONES 読売新聞 **Pro**